離島の地から思うこと

北海道立焼尻診療所　所長
貞　本　晃　一

私が、現在勤務する診療所は道北、羽幌町の離島、焼尻島に存在します。

島の名前をご存じの先生は多いと思いますが、訪れた方はほとんどいないのではないかと思います。周囲12㎞、人口250人、高齢化率52％、５年後には７割以上の定期通院中の患者が80歳以上になることが予想されますが、介護施設、入院施設がない当地でこの状況に至るまで高齢者が島に踏み止まれるとは思えません。昭和30年代には3,000人が住んでいたこともあったようですが、今は極限の限界集落と言わざるを得ません。

私がこの島に勤務するのは今回で２回目、１回目は平成19年６月から21年９月までででした。当時は全国的に医師不足のピークで、保健福祉部技監として勤務していた道庁には道内各地から医師派遣要請が連日のように有りました。手持ちの駒というと失礼ですが、自治医大の義務年限中の医師と一本釣りで採用した本州出身のドクターのみでは医師派遣要請に応えるには如何ともしがたく、三医科大学・医学部行脚の毎日だったことを思い出します。

平成11年当時、新しい臨床研修制度が導入され、大学の医局制度が大きく変わり、地域への医師の派遣体制が大きく変わることが予想されていました。臨床研修制度導入後に予想される今まで以上の医師不足への対応策として、当時廃止が検討されていた札幌市清田区にあった道立北野病院を、僻地に勤務する医師の研修・ローテーションの拠点としての役割を担う「地域医療研修センター」として活用する企画案を部に提出しました。当時の私は部の医療参事（課長職）でしたが、稚拙な企画書を片手に、単身道医師会の当時の会長のご自宅まで押しかけたり、札幌市医師会の理事会で「研修センター構想」の説明をさせていただき、理事の先生方から手厳しい批判を受け、すごすごと帰ったことを思い出します。今思えば若気の至り、顔から火が出るほど恥ずかしい思い出です。私の好きな言葉は「念ずれば通ず」ですが、その思いが通じたのか紆余曲折のあげく、北野病院は北海道厚生連が引き継ぐこととなり、曲がりなりにも「地域医療研修センター」が立ち上がりました。私は上司からそのセンターの立ち上げの支援を命ぜられ、２年間、同センターの副院長（兼センター長？）として派遣され、病院の改築、スタッフの確保、研修医の募集等に携わりました。一応、形の上では思いが叶ったようにも見えますが、現実は「研修センター」の名前には程遠いものでした。病院の改修工事が竣工して２週間も経たないうちに看板から「研修センター」の文字が削り取られるのを目の当たりにし、はらわたが煮えくりかえるほど悔しい思いをしたのが忘れられません。なかなか研修医が集まらず、やっと確保した研修医も、そのアパートまで何度となく「生存確認」に行かなければならないような人物で、医師確保の困難さを痛感させられました。２年後に私が道に戻ってからは「研修センター」は事実上開店休業状態、道医師会理事会で「研修センター」事業の経過説明を求められた際に、理事会の席で不遜にも「道としては一石三鳥だった」と申し上げ顰蹙を買ったのを思い出します。ちなみに一石三鳥とは、道として医師確保対策に尽力しているというポーズが示せたこと、単に取り壊せば１億円以上の解体費用がかかる古ぼけた病院から年間数千万の賃料収入を得たこと、私の給料を派遣先に出してもらったこと、組合対策ができたこと…etc。部の幹部の中には「一石八鳥」とまで言った者がいたとかいないとか。

最終的には収まるところに収まったというべきか、研修センターは廃院となり、私と、研修センターの運営に直接・間接に協力していただいた自治医大OBの先生方以外の関係者が、それぞれに当初の目的を果たした結末となりました。なぜ研修センターは失敗したのか、今この最果ての地で振り返ってみると、「医師不足」という事態が本当に存在したのだろうかとのパラドキシカルな疑問すら湧いてきます。「敗軍の将、兵を語らず」と言いますが、今から思えば、計画の熟度が低かったこと、力不足・努力不足も認めざるを得ません。もっとも、私は「将」ではなく、特攻隊長かせいぜい下級士官程度でしたが、計画（作戦）の直接の責任者ではありました。戦略として取り組むべき課題に下級士官の局地戦で戦っては当初から勝ち目は無かったのでしょう。局地戦は今でも継続中です。ただし人海戦術（地域枠）が加わりましたが、「いない、探す、またいなくなる」の消耗戦に変わりはありません。

焼尻の２回目の赴任は2012年４月からです。今回も天売・焼尻の医師が確保できないという事情があったことがその理由の一つですが、１回目の赴任の時とは異なり私は道の医師確保対策とは無縁の立場（北海道立心身障害者総合相談所長）でしたので、１医師としてこの地での勤務を希望して赴任しました。無理をせず島民の健康を守ることに多少でもお役に立てればと思っています。